

会 議 録

1 会議名

第1回上越市高齢者見守り支援ネットワーク会議

2 議題（公開・非公開の別）

(1) 上越市における高齢者に関する現状について（公開）

(2) 上越市の認知症に関する取組について（公開）

(3) 認知症施策についての意見交換（公開）

(4) その他（公開）

3 開催日時

平成28年1月21日（木）午後2時から午後3時30分

4 開催場所

上越市役所 第一庁舎 4階 第401会議室

5 傍聴人の数

2人

6 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委員：小池 弘、宮本 慶之、原 等子、五十嵐 靖雄、横山 郁代、飯塚 俊子、
仙田 恵、内山 嗣久、高山 寿春

・事務局：高齢者支援課 笹川課長、佐藤副課長、細谷係長、小酒井主任、石田社会
福祉士

7 発言の内容

(1) 開 会

(2) 委員紹介 新任委員から挨拶（内山嗣久）

(3) あいさつ 笹川課長

(4) 議 題

① 上越市における高齢者に関する現状について

(事務局)：資料1により説明 ー説明省略ー

(小池委員)：一人暮らしの高齢者数が8,639人ということで、前年より308人増えている
ということと、下の方の緊急医療情報キットの利用者が6,917人ということで
だいぶ数字が違いますが、この差は、配布を拒否されているのですか。

(笹川課長)：そうですね。お配りに行っても必要ないと言われる方もいらっしゃいます。

(小池委員) : 分かりました。

(原委員) : 質問というよりは、この施策への意見になるかもしれません。一人暮らし高齢者に対するふれあいランチサービスだとか、緊急医療情報キットというのは、大変有意義な対策で、実際に使われている方や支援されている方の中でも、こういうものをもっと市民の皆さんに知らせて、もっと活用できるようにしていってという意見がよく聞かれます。特に、ふれあいランチは近くにも使われている方が多いのですが、実際に対象は一人暮らしが限定なので、世帯分離をしているお宅は使えるけれども、一緒にお暮らしの方が、介護者で虚弱な御年寄だったり、虚弱同士の高齢者世帯だったり、認知症の二人暮らし世帯だったり、あるいは日中独居だったり、本当は使いたいのだけれども、一般の配食サービスではなく金額が安い市のサービスを使いたいという方が結構いらっしゃいます。利用者の幅を広げることは考えていらっしゃるのかお聞きしたいです。

(笹川課長) : 対象者の中で、日中独居は対象ではないですが、それ以外のものは状況によっては、対応しています。それからもっと広げる可能性という事になりますと、実はこれはかなりの金額が掛かっている面もありまして、実際には1食あたり配送料も込みでいくと、1,200円くらい掛かっています。実際に頂いているのは400円という状況ですので、財政的にはかなり厳しい面もございます。少なくとも、必要な方には届けていかななくてはいけないと考えていますので、今ほどの原副会長からの声も踏まえた上で、事業の中で考えていきたいと思っています。

(仙田委員) : 今の緊急医療情報キットの話ですが、救急隊が実際に現場に行ってそれを活用するわけですが、先程の拒否される方は、私は健常者だから必要ありませんと拒否されるのだと思います。一生健康で長生きしてもらいたいのですが、いつかは使う日が必ず来るという事でぜひ配布いただきたい。

ちなみにこれは速報値ですが、平成26年中に上越エリアで29件、救急隊が現場で実際に活用しています。平成27年中については34件です。健康でお話ができる時であれば問題ありませんが、いざという時のために安心のために置いていただく、使わなくても置いておくだけで安心ですよというアピールをして、全員の方に持っていただけるようにして頂けたらなと思います。

もう一点、見守り支援という形の中で、昨年実際に通報があり、到着して結果的に孤独死をされた方が何人かいられますが、新聞配達員からの通報で異常

を感じて発見されたとか、お弁当の配達事業者さんから通報があつてというケースもあります。こうしたセーフティネットが徐々に機能してきているのだと感じています。一番多いのは、家族や親族、近所の方々、友人などですが、そういった見守り支援協力事業も徐々に有効に動き出しているのだなと思っています。引き続きよろしく願いいたします。

(笹川課長)：医療キットにつきましては、配布は1回だけではなく、病気も年を取ると増えるという事もありますので、情報の更新等もしています。そういった時を機会と捉えながら、配布については引き続き頑張っていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

② 上越市の認知症に関する取組について

(事務局)：資料2-①～2-③により説明　—説明省略—

(原委員)：今御説明いただいた内容で、上越市でもかなりいろいろな取り組みがされているということが良く理解できました。

資料2-①で相談者の内訳の介護保険の認定状況ところで、未申請が半分以上いるという所と、チェックリスト該当者から要支援の方まで、要介護認定の中でも軽度の認定を受けている、もしくは認定も受けられていない状況の方も、このような相談内容を見ると、かなり認知症でお困りの状況にあるといったところだと思います。この数字を見た時に、初期支援の重要性を強く感じます。

資料2-③に移りますが、認知症カフェの御説明がありました。認知症カフェを今後支援の場としていきたいという事で細谷係長から御説明がありましたが、どのような支援をしていく予定なのかお聞かせいただきたいと思っています。

(細谷係長)：前半の部分は先生からの御意見という形でよろしいでしょうか。

(原委員)：はい。

(細谷係長)：認知症カフェの今後の支援ですが、認知症カフェにおいでいただいている人の状況は会場によってさまざまな状況にあります。ですから、全て同じ方向を向いてという事ではなくて、おいでいただいている参加者の方の状況に合わせて支援内容は変えていかなくてはいけないと考えているところになります。

今は包括が関わっているところが多く、ケアマネや事業所が関わっているところが少なくなっていますので、そこで話し合われた皆さんからの相談内容が、実際にどのような支援体制につなぐ必要があるのかというところをしっかりと

とこちらでも把握した上で、そこから新たな支援が必要なのかどうか、既存の支援で十分なのかというところを検討していきたいと考えています。ただお茶を飲んで愚痴を言い合う場という形を市では考えていなくて、そこで出た意見をしっかりと支援の方向性に繋げていきたいと考えています。

(原委員) : いろいろな認知症カフェのやり方があるので、細谷係長が考えられるのもごもっともでいいと思います。認知症カフェというのが通いの場であって、そこで認知症の人も参加している気分を味わっていただいて、自分も社会から疎外された人間じゃない、仲間の一人だという事を感じる事がすごく大事であって、家族がそういう本人の様子を見て「私はイライラしすぎていたな」ということを感じるのが大事だと思います。

ただお茶のみをしているだけでも通い続けて、介護家族や本人が少しでもホッとできる場、いつも家の中にいると「なにしているの。また同じことして」とイライラして怒鳴り声が響いているよりも、ちょっと外に出てホッとできる場所というのがすごく大事だと思います。ここは愚痴を言い合う場で何を言ってもいいし、怒っちゃって「私とんでもない介護者ね」と落ち込んでいても、それもありだよということを周りでフォローしあうという関係性を継続して、介護経験がある人が新たに来た人に「私もそうだったよ」と言うような、そういう関係性がすごく人を育てるといえるか、そういう経験があるので支援しすぎないというのもよいと思いました。

③ 認知症施策についての意見交換

(小池委員) : 私は民生委員をしております大潟地区の出身であります。大潟地区には一般の民生委員が18名、主任児童委員が2名で、合計20名おり、定例会を月に一度やっております。その中で、今の高齢者の見守りを必ず1か月に1回以上するという形をとっています。

それから、今高齢者支援課の皆さんから話があったように、地域ケア会議だとか、個別地域ケア会議だとかこういうものにも民生委員が必ず何人か出席するようにしております、ケアマネジャー、行政、地域包括支援センターだとか、こういう人達と一人暮らしあるいは認知症の皆さんの件についても話し合いをしながらやっております。

大潟では、認知症カフェが毎月第4金曜日にやられていますが、こういうも

のにも我々も何人か参加させてもらっています。自分の担当の中に、ちょっとあの人心配かなと思うような人たちがいたら、連れて行くような形をとっています。

(宮本委員)：上越市社会福祉協議会の取り組みという事で、皆さんに資料をお配りしています。認知症高齢者の把握、支援体制については、「支え合いマップづくり」を50世帯の身近なところでこのような大きなマップを作り、どういうところに心配な方がいるのかを把握しながら地域での見守り体制を作っていくという取り組みをしています。現在で160カ所近く作っておりますが、まだまだ進めていきたいと考えております。

それから福祉教育推進事業では、小学校中学校を主として、学校関係は福祉の教育ということで、職員が総合的な学習の時間等を使って色々な福祉教育の話をさせていただいており、認知症サポーター養成は、うちの職員でもキャラバン・メイトの資格を持っている職員がおりますので、子供から認知症の理解を深める取り組みもしています。

認知症予防では、「ふれあいいいききサロン事業」ということで、町内単位で集える場所を作っていただくということで支援させていただいています。先ほど細谷係長からお話がありました、地域支え合い事業のサロンと一体的に連動した形でこういう個所も増やしていきたいと思っています。今は市内で154カ所、社協が関わっているサロンがあります。

次に、具体的に認知症がある方への支援になりますが、日常生活自立支援事業という新潟県社会福祉協議会から委託を受けてやっている事業ですが、判断能力に不安のある方に対する福祉サービスの利用援助だとか、日常的な金銭管理などをするサービスを実施しております。現在140人の契約のうち、70人が認知症高齢者という状況で、これからますますこの事業の利用者が増えてくると思っています。

あとは法人後見事業、これは成年後見制度に基づくものですが、判断能力が全くない方、あるいは不十分な方に対する法的な支援という事で、社会福祉協議会が法人として受けて実施しております。現在18件の方を受任しており、こちら認知症の方が10件という事になります。認知症の方がサービスを利用しながら安心した生活が送れるように、28年度は地域に出かけて制度説明とかミニ講座を開催して理解を広げる取り組みを進めていきたいと考えていま

す。

(五十嵐会長)：上越医師会の関連ですが、高齢化が進んで上越市の人口が減少傾向にある中で、上越地域における医療に関する資源、医師の数や病院の病床の数がこれまでは増えて充実してきた傾向がありますが、医師が高齢化していったり、研修医が田舎の病院に来ないという事になってきて、大幅に増加していくことは期待できない、むしろ減っていくような状態になっています。

そういった中で、地域医療、予防医療、病気になってからの治療、障害を受けてからの介護等を充実してやっていくということで、患者さんと御家族と医療機関と、また患者さんの友人、隣近所の方、町内会や民生委員の方、介護サービス、行政、保健所、その他色んなところとの多くの職種での連携が大事になってくるだろうと思います。服部医師会長を先頭に、地域のコーディネーターという事でいろいろと考えているところです。在宅医療推進センターを設置して充実させていこうといろいろな取り組みをしている所であります。医師会の関係の動きとしてはそんなところです。

(原委員)：個人的なところで認知症と家族の会の世話人をしている関係で、うちの大学で2,3か月に一度、不定期ですが認知症サロンのような家族の会の活動として、若年の認知症の御家族と御本人の集いの運営をさせていただいています。そんなにたくさんの参加者はいませんが、大学の中の静かな環境の中で御家族や御本人が交流しあうという事で、若年の方々が出ていく場が難しかったり、少なかったりしているものですから、こういった人たちも先ほど言った地域の認知症サロンの中で仲間に入れて頂けるよう、上越市でもさらに取り組みを進めていってほしいと感じています。なかなか御本人、御家族ともに羞恥心というか自己開示できない所もありますので、市での活動以外でもそういうNPO等の活動も必要かなと感じているところです。

キャラバン・メイトも、うちの大学の学生に積極的に取らせていないなという事も、いつもこの会議を聞きながら反省していますが、少し学生にもこういう授業があるという事で進言して積極的に取り入れていけるように努力したいなと感じているところです。

五十嵐委員から医療情勢が今後厳しくなる予想という話がありましたが、緊急医療情報キットというのが先ほどあって、その中に例えば終末期の事前指示みたなのものは入れていますか。積極的な医療の差し控えという所ではなくて

も、事前にある程度市民に終末期にいつ何時どうなるか分からないという教育をしていき、そういう医療キットの中に人工栄養、経管栄養、胃ろうが必要になった時に自分の意思が示せない時にやっていいかどうか、人工呼吸だとか人工マッサージを受けるかどうかといったところも含めて議論はありますが、こういうものに入れていくことによって不必要な医療、本人が望まない医療を軽減していくことにつながると思うので、ご検討いただければと思います。

(横山委員)：私からは私が関わっている団体がやっていることと、私が個人的にやっていることと二つお話ししたいと思います。

一つ目の団体ですが、私は上越市まちづくり市民大学OB会という会の事務局をさせていただいております。この上越市まちづくり市民大学というのは、設立当時は上越市の方でまちづくりの人材を育てるという事でやっていたが、修了生でOB会を作りまして、そのOB会でまちづくりの人材の育成について引き継いでいこうということで、市から仕事を引き継いでいる会です。

毎年受講テーマを決めていますが、27年度のテーマは高齢者の居場所づくりに取り組んでいました。認知症について関心の高い受講生もたくさんおりましたので、地域支え合い事業について自分たち市民として住民としてどう関わっていけるかというのをテーマにし、社会福祉協議会の方、行政の方から講義をしていただきました。講義をして頂いた中で、それぞれグループになり、次回自分が関わっていく取り組みについて調査研究という事をまとめて各自12月に発表しました。発表しただけでは足りないという事で、4月以降それぞれが取り組んだテーマについて地域に持ち帰ってそのことを実践していくという事をやっています。

私個人としては、私も大潟区に住んでおりまして、こちらの認知症カフェの運営委員会の委員長をさせていただいております。認知症カフェという名前の響きについて、カフェって何だろうねっていう興味から非常に参加者も最初は多いですが、認知症が頭につくと、当事者を家族がそこにどうやって連れて行くかっていうことに関していうと、本当に来てほしい人がなかなか集まって来てくれない、これは会を重ねていくうちに参加者からの意見としてありました。次年度以降どうすればいいかという会議を昨年末開催し、お楽しみ会的なことや主体的に自分たちでピーアールしていこうという意見もありました。それから各区においてまちづくり振興会というものもあるので、そういった各団体と連

携を取りながら、こうした認知症についても取り組みを広めていかなければいけないのかなという意見もありました。4月以降は、こういうことを一つ一つ運営委員会の中で協議しながら実際にカフェの運営に活かしていきたいなと思っております。

今日の会議の中で、サポーターの養成講座、受講生の今後というところでお話があったので私の意見ですが、私もサポーター養成講座を何回も受講しておりますが、1回受講して終わり、そのあとの自分が持っているスキルとか学んだこととか、他の人の意見とかというところで、なかなか活かせるところがないなと感じているので、サポーター同士のネットワークというか、軽いゆるやかな仲間づくりというか、こうしたことをやっていかないとサポーターとしての活動としては根付いていかないのではないかと感じています。積極的にこういう講座を開きながら、認知症についての意識、知識を広めていって、地域の中でどうやって取り組んでいくかについても、もっともっと考えていく必要があると感じております。

(飯塚委員): 本日は上越市さんから非常に貴重なデータを提供いただきましてありがとうございます。局としても大変参考になる資料だと感じました。最近では市、地域包括支援センター、認知症疾患センターなど様々な皆さんの御尽力で、保健所への一般の方からの相談というのは非常に少なくなっている状況にあります。

当部の今年の取り組みについて簡単に御紹介させていただきます。一つが平成26年から、病院に勤務する方の医療従事者向けの認知症対応力向上研修というのが位置づけられておりまして、病院を会場にしまして地域の認知症サポート医、それから病院等に勤務されております認知症の認定看護師さんの御協力の下で、病院に勤務されている医療従事者の方々への研修をしているところです。

それから市の方からも御紹介のありましたサポーター養成講座を、県職員を対象にして開催したり、サポーター養成の講師役になりますキャラバン・メイトの養成講座等も、疾患医療センターとか看護師さんの御協力の下で開催させていただきました。

次の点として、医師会の五十嵐先生からも御紹介いただきましたが、今年度まで保健所で事務局を担ってございました在宅医療連携協議会というのがあります。その中で在宅医療を担っているケアマネとか医師、訪問看護師など多職

種の連携をしていく中で、認知症の問題というのがかなりクローズアップされております。多職種連携研修会の2回を、認知症をテーマにして開催しまして述べ151名に出席いただいた現状になっております。ここも、上越市、認知症疾患医療センター、地域のサポート委員ですとか認定看護師等々、連携をしながら研修等をこれからも企画していきたいと考えています。

(仙田委員)：消防に関しまして、当然緊急出動という事で様々な病気の方、特に高齢者が多いわけですが、色々な方に接する機会が多いわけですね。医療機関に搬送した際には、医師の方にきちんとその方の観察した結果、生活状況も含めて様々な情報をきちんと的確に報告するように努めております。

問題になってくるのは、特にお一人暮らしの方で御本人が通報されてきて、おっしゃっていることと中身が違う、搬送する必要があるケースは医療機関に搬送すればよいですが、そうではない明らかに何も症状がないケース、そういったことを頻繁に繰り返すケースがあります。様々なセーフティネットがあるにも関わらず、そういったものにフォローされない方をなくすように高齢者支援課から頂いている弱者情報のフィードバックを、連携強化して情報を共有することが第一だと考えております。そういった問題のありそうなケースについて丁寧に情報共有を図っていきたくて、関係機関全体でそういった方へ対応していく必要があると、消防だけでは力が弱いので、全体でそういった方をどうやって迅速に早く的確にとといったことを務める必要があると考えています。

(内山委員)：初めての会議でこういった発言をする場が分からなかったのも、数字も持ってこなかったのも大変恐縮ですが、私からは警察を取り巻く高齢者の現状という事をお話しさせていただければと思います。

全国も県もこの上越市も同じであります。警察が取り扱う案件については、高齢化というのがキーワードであります。交通事故に関しても、加害者、被害者共に高齢者の率が非常に高くなっていますし、死者数に関しても高齢者が断然に多いというところがあります。また、犯罪についても少子高齢化の中で、犯罪の被害者もそうですが、加害者も高齢者、あるいは高齢者同士が被害者加害者の事案も多くなっています。一例言いますと、昨年春先に高齢者同士、同じ町内の中での高齢者のトラブルで、80歳同士の中で殺人未遂という罪名ではありますが、そういった形で逮捕検挙されている事案もありますし、非常に危機感を感じる場所でもあります。

また、万引きという身近な犯罪であります。万引きについても昨年 120 人ほど検挙されておりますが、どちらかという万引きは少年非行の代名詞的なところがありましたが、今は 65 歳以上の高齢者が 6 割以上を占めています。少年の万引きについては、確か 22 人しか補導されていなかったと思いますので、いかに高齢者の方が多いか、高齢者に対する万引き防止策を立てる方が重要になってきているという現状であります。

また、特殊詐欺に関しても、これは被害者の方ですが県内でも 288 件被害があつて、7 億円を超える被害が出ています。上越市についてはおかげさまで一昨年 40 件というところから、非常に減少して 12 件の 2,128 万円ほどの被害になりましたが、これについても 5 割以上が 65 歳以上の高齢者が被害者になっております。特に特殊詐欺の代名詞でもある「オレオレ詐欺」に関しては、孫かたり息子かたりということがありますので、どうしても高齢者の方が被害にあつてしまう。これについて全体の 6 割が「オレオレ詐欺」なんです。が、「オレオレ詐欺」の 9 割以上の被害者が高齢者になります。そういった意味で、高齢者に対する犯罪の被害者に合わせない・させない、交通事故の被害者にさせない・起こさせないという意味では、これから両方の面での対策が必要になってくると思います。

先ほどの特殊詐欺の関係については、昨年地域包括支援センターとかケアマネジャーとか、そういった方々によって、100 万円の被害を未然防止できたという事案もありました。これからは、様々な関わりを持っている方から見守り活動の中で、そういった状況を発見していただいて、警察に通報、未然防止という形で御協力いただければと思っています。金融機関等で未然防止、水際防止という事もあります。が、介護している最中に電話が掛かってきたりとか、あるいは様子がおかしかったりというところで発見、通報いただいて、昨年 100 万円を未然防止しました。その方は、認知症で実際に息子さんからも電話をかけ確認してもらいましたが、支援の方をお願いして親戚や見守りに来ていただいたという状況であります。今後、そういった形での未然防止が増えていくのかなと思っています。警察を取り巻く高齢者の現状という事で、簡単ではありますがお話をさせていただきました。

(高山委員)：老人クラブの立場でお話しさせていただきますが、老人会では健康、友愛、奉仕というこの 3 つのスローガンを掲げて活動をしています。その友愛の中で、

会員の皆さんから友愛募金というものを募金させていただいております。そのお金の使途ですが、日常生活に全面介助を受けているような寝たきりの方に、その友愛募金から毎年1年間に1回3千円ずつお見舞いを差し上げています。27年度は269の方が対象でもらい受けています。

一人暮らしで家に閉じこもっている人への友愛訪問という事で、その友愛訪問を実施しているクラブへ対象者一人当たり千円交付しています。これは個人でなくて実施しているクラブの方へ差し上げています。

私は春日新田の七福会に所属していますが、認知症のサポーター養成講座のお話を春にお聞きした時に、これは是非自分のところでやらなければならないと思い、去年の6月に実施しました。終えた感想を聞いてみますと、みんな良かったと言っています。高齢者ですから難しいお話よりも、DVDなど映像を見させていただいたのが非常に良かったです。自分と同年代の人がお金を数えることもできない、それが自分だったらどうしようと気持ちが喚起されるというか会員の方は感動していました。もう半年以上も経ちますが、受講しますとオレンジリングをいただけます。今でもいろいろな行事があると、そのオレンジリングを着けてくる人がいます。先ほどお話がありましたように、こういう講座が終わったらそこで話が途切れてはダメなのです。常に関わりかけていないとダメなのです。ある会員の方は、自分がもし認知症になって徘徊したら困るからこのリングに名前と住所を書いておくのだと。これはちょっと趣旨が違うと思いましたが、アイデアとすればいいアイデアですからね。いいことですねと言ってそんな話をしていました。常に機会があるごとに話題にしていかないと、そこで話が切れてしまいます。28年になったら類似した講座などを持てればいいなと思っています。

(五十嵐会長)：各委員の皆様から意見を頂戴いたしました。時間も押しつつありますが、それぞれの意見について御意見御感想等ありましたら御発言お願いいたします。

(高山委員)：私の母が102歳で5年ほど前に亡くしましたが、90歳を過ぎてから認知症になってきていました。そしてその102歳の間に、病院と施設を5カ所ぐるぐる回りました。3か月経ったら「次の施設を探してください」と言われ、その度に色々な施設を行きましたがすぐどうぞと言う施設もなかなかない。母がだんだん認知症になってきた時に何が一番大変かという、家族です。

今施設でもいろいろな虐待やいじめだとか、老老介護で一方が認知症になった場合には、介護負担で殺人までするという色々なニュースがよく出ています。そうすると、認知症になったその人よりも、周りの家族の支えというのが非常に大事になると思いますし、私どもの老人クラブの会員の中にも、実際に認知症の方を抱えている方がいらっしゃいます。一番困るのが徘徊です。夜もおちおち寝てられないわけです。そういう色んな苦労話をお聞きしますが、そういうお立場の方にただ、こうした方がいいですよと言っても理解できません。やはり、共感的な立場で理解してあげないと、非常に困っている人が多いのではないかという事を強く感じております。皆様方のいろいろな立場で御協力しながら進んでいただければと強く感じています。

(五十嵐会長)：その他いかがでしょうか。先ほどから出ておりました認知症サポーター養成講座の後、養成された方がその後こういう働きをしたとか地域の役割を果たしているとか、そういう具体例がもしありましたら、お聞きしたいのですが。その他いかがでしょうか。

(原委員)：今皆さんの中でも抱えているのは、家族がもし認知症になったらどうしようというのが第1段階だと思います。一緒に暮らしている家族の方が目配せをすれば気付くことがあるかもしれませんが、家族が離れたところに住んでいらっしゃると、認知症が進んでいく過程に立ち会えない、たまに帰ってきてても自分の親がそういう状況になっていることに気付かず、隣近所の方が気付くことが多いような気がします。

今後サポーターさんたちとつながりを作るとすれば、見守りあう仕組みまでも一緒に考えられるようなサポーター養成講座にしていくことも大事なのかなと思います。定年を過ぎた方で、第2の自分の人生を過ごそうという方たちの中にも、地域のために何かをやってみたいと思われる方もたくさんいらっしゃいます。そういう方達にも今までの仕事の経験値を活かしていただけるような関わり合い方など、人材育成というか人育てというのも地域の中でやっていく必要もあると思います。そういうものに関心があるNPOやボランティアグループでもよいですが、いずれ点が面が変わるような仕組みとして、社協や行政、市民がお互いにそういうものを支えあい、そういうグループに支援しあっていく仕組みを作っていくのも必要だと思います。

④ その他

(質疑応答なし)

(5) その他 事務局からの連絡事項

(佐藤副課長)：五十嵐会長、長時間に渡っての議事進行、ありがとうございました。

最後に事務局から連絡をいたします。現委員の皆様の任期は、3月31日となっており、本会議が最後の会議となります。新委員の選任につきましては、3月に入りましたら、所属団体等へ推薦を依頼させていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、本日の上越市高齢者見守り支援ネットワーク会議を閉会いたします。ありがとうございました。

8 問合せ先

健康福祉部高齢者支援課介護指導係

TEL：025-526-5111（内線 1676）

E-mail：koureisya@city.joetsu.lg.jp

9 その他

別添の資料もあわせてご覧ください。